



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	座長解題：生活改善・公民館活動からみた北海道農村社会の変容
Author(s)	坂下, 明彦; 清水池, 義治
Citation	フロンティア農業経済研究, 23(2), 1-2
Issue Date	2021-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/83086
Type	other
File Information	23(2)_01_SAKASHITA_SHIMIZUIKE.pdf



生活改善・公民館活動からみた北海道農村社会の変容

北海道大学 坂 下 明 彦

北海道大学 清水池 義 治

Transformations of Rural Society in Hokkaido from the Viewpoint of Livelihood Improvement and Community Center Activities

Akihiko SAKASHITA
Hokkaido University
Yoshiharu SHIMIZUIKE
Hokkaido University

1. 本シンポジウムの課題

営農の課題を中心として語られてきた北海道の農村問題においても、近年、人口問題を背景として生活問題が重要なテーマとして認識されるようになってきた^{注1)}。

そもそも内国植民地である北海道の開拓生活においては、開拓者間の共助が必要不可欠であった。戦前期に農家の定住化が進んだ農事実行組合型集落では相互扶助の関係が強まり安定性も高かった。一方で、引揚げ等を契機として「緊急」の名のもとに形成された戦後開拓型集落では生活そのものの維持がやっとという水準から戦後のスタートが切られた^{注2)}。

行政による農村のインフラ整備は、農業開発が最優先され、それに付随してやっと生活領域に及ぶというのが実態であり、鉄道、道路、排水路、用水路という産業インフラの整備は進んだが、飲用水の確保や送電線の整備などは各地の事業組合や農協などが担うケースも多かった。その間、さ

まざまな生活課題は農村住民全体、および性別・年齢別集団の活動によって解決が試みられ、その活動を通じて住民組織も強化されてきた。そして、それをバックアップする行政的な支援があったが、当初はそれをリードする場合が多かった。

本シンポジウムでは、これまでほとんど手がつけられてこなかった北海道の農村における生活面でのさまざまな取り組みの軌跡を明らかにし、そこから時々の農村の課題の変化を浮き彫りにすることを課題とする。日記やオーラルヒストリーなどの生活史論的な蓄積が少ないため、戦後から高度経済成長期に大きな影響を与えた行政的な普及・教育の2大分野である「生活改善運動」と「公民館運動」の史的展開を通じて、農村住民、女性、青年層が目指したものと、その運動によってもたらされたものについて明らかにする。

2. 報告の構成

報告は、まず、座長解題の補足報告として井上淳生氏から「戦後の全国・北海道の農村生活の概

観」と題して、統計資料の整理と画期区分を行ってもらう。

第一報告は、農村社会学の分野から小内純子氏かに「北海道における生活改良普及員の実践活動と農村社会」を報告していただき、道職員である生活改良普及員によって組織化された生活改善運動の諸側面を通じて、農村女性の視点から生活問題の構造と変化を明らかにしていただく。

第二報告は、社会教育学分野の矢崎秀人氏から「公民館を中心とした村おこし運動に見る農村社会形成」を報告いただく。社会教育主事による社会教育の拠点とされた公民館を中心とする住民運動の内容と組織化を通じて農村社会の画期ごとの成果と課題を浮き彫りにしていただく。

第三報告は、農業経済学分野から正木卓氏により「農業・農村の変容と集落存続の取組み」を報告いただく。ここでは、第二報告の対象地である北海道オホーツク地域・置戸町を対象として実施した座長・報告者(3名)+αによる共同調査を踏

まえて、農業展開の異なる3つの集落の変容とその存続の取組みについての整理を行っていただく。

なお、農業普及制度に関する専門家である黒澤不二男氏と、農業の支援システムの観点から井上誠司氏に、コメンテーターをお願いしている。

注1) 人口問題については、とりあえず坂下[2] P.257を参照。

注2) 北海道の集落の性格と類型については、坂下[1]を参照。

引用文献

- [1] 坂下明彦「北海道の農業集落類型と農家の階層構成」、岩崎徹・牛山敬二編著『北海道農業の地帯構成と構造変動』、北海道大学出版会、pp.71-74、2006年
- [2] 坂下明彦「総合農協の社会経済的機能」、田代洋一・田畑保編『食料・農業・農村の政策課題』筑波書房、pp.221-260、2019年